

チロルの思い出

伊夫伎欽子（世田谷区）

日時：2015年6月26日～7月9日

費用：総費用 約¥320,000（航空運賃、移動費、ホテル、食費、観光費用含む）

リーダー：四位正名

参加者：磯辺一郎、伊夫伎夫妻、笹野夫妻、四位正名、杉村和子、その他3名 計10名

チロル（風という意味）は、ご存じのようにオーストリア西部と、チロルの語源となっているチロル城が今も残っているイタリアにまたがり、スイス、ドイツとも隣り合っている地方をいう。

そこに住む人々は自分達をチロラーと呼び、独自の文化と歴史を持った郷土愛の強い誇り高き民族である。

イン川と幾つもの谷を麓に持ち東西に走るアルプス山脈は夏でも氷河をまとう連峰が聳え立ち、冬はスキー、夏は避暑客やハイキング客を引きつける風光明媚な場所である。

谷間の村々を次々と移動して、スキーヤー達は峰々をゴンドラリフトで1,500～2,000mまで登っては一気に滑り降り、次の村で泊まっては次の峰を登ってまた滑降を繰り返してスキーの醍醐味を楽しむという。

*** シニア 10人チロルへ ***

私達シニアの旅仲間10人は6月末、夏のトップシーズンに入る前の花が咲き始めた頃、こういったアルプス連峰の谷あいの村、オーストリアのゼーフェルドとアルプバッハに2週間滞在した。

白雲たなびく透きとおるような青い空、光り輝く緑の山々、鮮やかな色とりどりの花々、すそ野の牧草地で草をついばむ幸せそうな牛の群れ、教会の尖塔を取り囲んで点在している木造りの美しい村々、そういったパノラマ絶景をハイキングの行き帰り、2,000mレベルのゴンドラから眺め下ろしながら、平均年齢74歳の我々は<これぞ天国へのお土産！>と感慨深く脳裏に焼きつけたものだった。

今回の旅は文字通り Foreign Individual Tourist で、経験豊かな四位リーダーが10カ月前から綿密な案を練り始めてくださり、おかげで移動その他トラブルもなく安心できる旅だった。

旅の間はしっかり役割分担をし、運命共同体？！く

らいの覚悟で協力し合ってお手伝いをした。

四位リーダーには感謝、感謝いっぱいのである。

今回こそはヨーロッパのヴァカンススタイルにならない、ゆっくりスローライフを楽しみ、美味しい空気を吸って命の洗濯！と日本を発ったが、やはり現地に着くとアドレナリンが100%発生、日本人の性分がフルに出て、結局魅せられたようにあちこち足を伸ばした。

でもそこは自由旅、10人の団体行動ではなく、体力に合わせ、行きたい所へ行きたい人が行くというスタイルだった。

*** 順路 ***

滞在先とそこを拠点に私達が三々五々訪れた場所を、簡単に日を追って地図と一緒に紹介してみよう。

① ゼーフェルド 6月27日～7月3日：7泊

ゼーフェルドは南は散策に最適な湖、北はゼーフェルトヨッホ（2,064m）に囲まれた山岳リゾートの町で中心に教会があり、瀟洒なみやげ物店が軒を連ねている。

大型スーパーもあるが昼休み、夕方も5～6時には閉店、これがノーマルなのに、深夜まで営業の日本のスーパーに慣れきった我々は当初戸惑い気味。

酪農国だけあって、バター、チーズ、ハム、スモークベーコンなど保存のきく加工品は豊富なのに、不思議とステーキ用などの牛肉は少なく、こだわりの霜降り肉などは論外。

野菜売り場は狭く品数も少なく値段も高め。果物、菓子パンなどの甘いものは多く、メタボは納得。

夕方には広場でアメリカから遠征の学生ブラスバンドの演奏など、イベントが沢山あった。

* オーバーグルグル（宿に大型バスの送迎 片道約2時間）

ドライバーは英語OKと依頼済みだったのにドイツ語のみ。コミュニケーションは紙と鉛筆で。

トップシーズン前でまだ動いていないゴンドラもあったが、ホーヘムート（2,653m）へ。空気の美味しい展望レストランでビッグなじゃがバターのランチをほおぼる。

バス窓からのイン川は雪解け水で流れは早く濁っていた。



オーバークルにて全員写真

*インスブルック(列車で 40 分)

ランチはお城の庭で屋台のバーガー、街角でソフトクリームの一休みなどぶらり街散策。アンブラス城、凱旋門、王宮、大聖堂、インスブルック最古のホテル(コルデナー・アドラー)の入り口にはゲート、モーツアルト、ハイネなど宿泊客の名を刻んだプレートがあった。<黄金の小屋根>に感嘆する観光客にはぜひとも金閣寺を見てもらいたい!

*ゼーフェルド・シュピツェ (2,220m) からヘルメレコプフ (2,224m)

2~3,000m 級の山といってもスキーヤーのためにどの山にもゴンドラリフトが整備されているので、ほとんど頂上近くまで簡単に行ける。ここもゼーフェルド・ヨッホ (2,064m) までゴンドラを利用し、そこから稜線をトラヴァースしてシュピツェを目指すわけだが、高度差 160m、距離 700m でも、足元は岩石のガレ場で要注意! 私は不覚にもわかっていながらストックを右谷間方向についてしまい、バランスをくずし冷や汗ものだった。自分の体力を過信し集中力を欠いたものと大いに反省している。

*ミッテンヴァルト (ドイツ 列車バス、乗車時間は 1 時間、乗り継ぎが良ければ 40 分)

17 世紀からヴァイオリン制作で知られ、町並みの家々の壁画が目を奪う。どれもフレスコ技法の聖画で手入れが行き届いていた。

*レッヒ (ザクトアントン経由、列車で 3 時間)

ゼーフェルドで遭遇した日本の中年女性が「ここで死にたいくらい…」と薦めてくれたので遠路訪れた。

ここも谷あいのスキーのメッカ。シーズン中はセレブが集まるという。町を流れるレッヒ川はイン川と違

い清流だった。特にとりえのない町という感触だったが、後でこの町の良さは最低 1 週間滞在して山からの眺めを楽しまないといけないと聞く。やはりセレブの町か!

*その他

ドイツの最高峰ツークシュピツェ(2,966m)、ブレンナー峠ハイキングと行動範囲を広げたメンバー。晴天続きも幸いし、東西に走る鉄道網が整備され、グループ割引料金は 2 人から。10 人だと半額以下になり、遠出には嬉しくありがたかった。

私達 3 名はゼーフェルド近郊、世界のベスト 100 に入る Seefeld Wildmoos でゴルフプレイ。アルプスの絶景をコースから楽しむはずだったが、1 人乗りの電動カートのアクセルとブレーキは日本にはない右手グリップレバーの操作、慣れるのに一苦労で楽しまないうちに終わってしまった。

② アルプバッハ 7月4日~7月8日: 4泊

ゼーフェルドから東へ。途中トラツツブルグ城、世界最大級のパイプオルガンのあるクーフシュタイン城塞へ寄りながら 8 時間のバスドライブで到着。

アルプバッハはヨーロッパで一番花の美しい村と言われる村で、木造りの家々はゼラニウムが競うように咲いていた。ちょうど年一度の村祭りの日に当たり、バスは宿まで行けず、宿のチロルの民族衣装を着てバイクに乗る肝っ玉母さんのオーナーが娘と一緒に重い荷物を運んでくれた。

ここは小さい村で 1,500 年頃に建てられた宿は郵便局や村人の食堂も兼ねていたようで、今も <Postalm Hotel & Restaurant> と看板を掲げたホテルが目に入った。レストランは 4、5 軒あり毎夕店を変えて郷土料理を地ビールで味わった。どの店も味は似ているが、ソースに一工夫して個性を出していた。



アルプバッハの村祭

*アッヘン湖

イエンバッハから齒軌条式蒸気機関車でアッヘン湖岸へ。黒煙をもくもく出しながら後押しされる汽車はノスタルジックと評判。岸で待つ遊覧船に乗って水面にアルプス連峰を映す湖を楽しむ。晴天とあって観光客は多く、ほとんどが中年カップルか 4、5 歳位の子供連れ。

*マイヤーホーフェン

ブリックスレグから蒸気機関車に乗る。1 両だけ特産品のスワロフスキーを散りばめたクリスタル号があり別料金。シニアも童心に帰ろうと奮発。乗客は我々だけだったのでツイラータールビールを飲んで盛り上がった。

ツイラータールと呼ばれる谷あい（タールは谷の意）をのんびり走って1時間余りでマイヤーホーフェンに到着後、街中を歩いてゴンドラリフト乗り場へ。ベンケンアルム (1,980m) からの眺望はさほど険しくなく、高さはあっても丸みのある安定感、穏やかな感じを受けた。



スワロフスキーで飾り立ったクリスタル号

*Village Walking とホーンボーデン

ゼーフェルド、ココアルプバッハ、ともに滞在客にはチロルカードが発行され、ローカルバス無料。その他地元のイベントや一部ゴンドラも無料。これを利用して一日、午前中は村のボランティアガイドによる村一周、午後ローカルバス、ゴンドラを乗り継いで 30 分でホーンボーデン (1,840m) へ。ここはまさに天空の花園！黄金色のアルペンアネモネがアルプバッハの村を見下ろす斜面一面に咲き乱れ、自然のなせる美しさに見惚れ、息をのむ。風にのる牛糞の良い！臭いを気にせず、レストハウスの新鮮な牛乳でささやかな幸せに乾杯！

③ 最終日 7月8日 ミュンヘンへ： 12；35 着

ミュンヘン 1 泊からスタートしたチロル西から東 1 周の旅もスタート地点に無事戻った。中央駅のコインロッカーに荷物を預け、集合時間を決めて解散。街に出かける人、観光バスに乗る人、お土産を買う人とたっぷりある時間を有効に使い、夕刻には全員揃って電車で空港へ出発。翌 9 日午後には定刻通りに羽田に帰国した。

*** おまけ ***

◆ANA 羽田出発遅延。機体整備のため 4 時間 20 分遅れ。16:50 やつと離陸。昼食は ANA のラウンジでサービス。アルコール、料理もビュッフェスタイルでエコノミー客には上等。食後は滑走路を見ながらのシエスタ？でもちょっと長すぎ。

「ミュンヘン到着深夜になってホテルへの移動手段は？」と ANA のスタッフに尋ねると思わぬ答えが・・・
「車を手配します」

10 人は空港で出迎えを受け 2 台のタクシーに分乗、重い荷物の移動も省け、ホテルに横付け。いろいろ尋ねてみるものですね。

◆最初の滞在地ゼーフェルドはフルキッチン付きの比較的快適なアパートメント。ならば地元の食材を買い込んで夕食は自室でと、ビールなど重い食材をどっさり。ずっしりとビニール袋は重く、タクシーもバスも来る気配なし。せめてアパートへの近道でもと地元らしきオジサンに声をかけると、私の肩に手をかけ大そうに親切に地元の人しか知らない小川に沿った牧草地の抜け道を教えてくれた。そして私の手元を見て、「その荷物重そう。車で運んでおいてあげよう」日本ならまず丁寧な断るだろう。でも、<この人は善人っぽいし、手ぶらで散歩がてら歩いたらどんなに楽しいだろう・・・> だけど厚かましいついでに、「私も乗せてくれないかしら？」と頼んでみると「私の車は小さいし、荷物が載っているから人は乗れない」とのこと。こうなったら今さら断れないし、信頼するしかない。一つの賭けと親切を受けることにした。

教えられたとおり、町を見下ろす眺めの良い小道を歩いていると、向こうから杖をヒョコヒョコついたさつき見覚えのある色のポロシャツ姿が近づいてくるではなか！半ばビックリ、半ば感激して旧友のようにハイタッチすると、「荷物はフロントのテーブルに置いたよ。あそこのオカミサンは昔のガールフレンドでね。あなたは日本からでしょう？私は昔このスキー学校のマスターでね、任天堂の娘を特訓したのさ。でも脊椎を痛めて今は杖が要るのさ。30 年も昔の話で・・・懐かしいよ」私はちよっぴり疑った狭い心に恥じ入り、

改めてお礼を述べ、彼の歩調に合わせてアパートに着いた。

淡いブルーの可愛い車が止めてあった。フロントではおしゃれで気さくなレディのオカミサンがいつもの笑顔で迎えてくれた。スキー学校の元校長先生は「ガールフレンドだったんだよねエー」とまた話を繰り返す。オカミサンは「昔のハナシ」とピシヤリと釘をさした。校長先生、もしかして久しぶりに会いたかったのかな？感謝！感謝！



オーバークルグル



トラヴァースのガレ場で一休み



ホーンボーデンのアルペンアネモネ

◆FITスタイルの旅でないとなかなかできない経験です。

WSCにはFITスタイルが企画できる能力のある会員が沢山おられると思います。もちろん、状況により日帰り旅行、国内旅行、旅行代理店の助けを借りる変化に富む旅行と、選択肢の幅が広がり楽しいものですが、たまにはWSCの原点でもあるFITも魅力的です。

[メリット]

1. 経費が30%近く節約できる。エアチケットは自己調達。宿代支払個別、共通雑費は共同財布制など内訳がわかりやすい。
2. 時間が自由に使える。
3. 仲間意識が強くなる。
4. FITならではのハプニングも良い思い出になる。

[デメリット]

◎リーダーの時間的、体力的、精神的負担が余にも大きい。

[デメリットを軽減するために]

1. リーダーが企画の段階からサブを決め、1人の負担を減らす。
2. 参加者は自己責任はもちろんのこと、全面協力の意識を高く持つ。
3. お金で埋め合わせのできる問題ではないけれど、FIT企画に限り参加者は参加準備金を増額してリーダーへ感謝の意を表し、労をねぎらいたい。
今さらこんな話など、とっくにわかっていることなのでしょうが、今回の旅で改めて感じ、またタイミング良くFITの魅力を例会で講師が話されたことも知り、加えさせていただきました。

